

氏名: 久芳 木乃実 (くば このみ)

実習先: タイ・カセサート大学短期研修プログラム

実習期間: 2026 年 8 月 10 日(月)~8 月 21 日(金) ※渡航日を除く

カセサート大学短期研修プログラム帰国後報告書

【はじめに】

酪農学園大学の学生であれば一度は必ず耳にしたことのある、タイ・カセサート大学への留学。実を言うと、当初は自分自身が参加することはあまり考えていませんでした。しかし、4 年生になり実習先やゼミの忙しさを意識し始めた頃、「留学に行くなら今がチャンスかもしれない」と感じたことが応募のきっかけでした。最初は「このような勢いで参加してもいいのだろうか」という迷いもありましたが、次第に「海外の獣医療はどのようなものなのだろう」という強い好奇心が上回っていきました。実際に留学を終えて帰国した今、海外の総合的な獣医療に直接触れられたことが、自分にとって大きな収穫だったと感じています。タイ特有の獣医療や環境について、現地で体験した様々な学びを本報告書にまとめたいと思います。

【Aquatic Medicine】

研修の最初の 2 日間は、アクアティック（水産）分野を中心に行われました。初日は専門の先生による午前中の講義からスタートしました。タイではティラピアや淡水エビ

(Prawn) などの淡水養殖業が非常に盛んであり、それに特化したアクアカルチャーが浸透していること、バイオセキュリティ面での対策法、さらには世界人口の増加に伴う食糧不足解決の鍵としての水産養殖の重要性など、幅広い知識を学びました。

1 日目から 2 日目にかけては、実際にティラピアやエビの養殖ファームを訪問しました。ファームのオーナーから養殖方式や餌の配合・調整方法についての説明を受け、水質検査やサンプルを用いた微生物検査など、水産現場における獣医師の役割を体験することができました。アクアティック実習の中で最も印象的だったのは、2 日目後半に訪れたワニの養殖場です。このファームではワニだけでなく、ナマズ、バッファロー、サトウキビの生産も行われており、ロスを最小限に抑えた効率的な養殖方式が非常に画期的でした。何より貴重だったのは、ワニの卵掘りと、卵からの孵化を直接体験できたことです。



ファームオーナーさんからいた
だいた、採れたてサトウキビ



ワニの卵掘り



卵から孵らせた直後の赤ちゃんワニ



バッファローに生草を
食べさせる様子



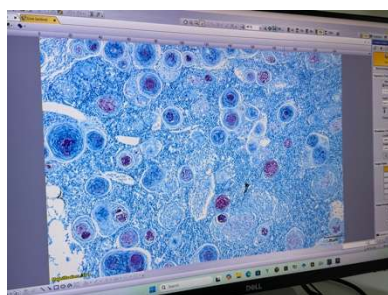
ワニの触れあい体験

【Veterinary Diagnostic Center】

3～4 日目は、研究施設である Diagnostic Center で実習を行いました。3 日目は豚インフルエンザの ELISA 検査とマイコバクテリアのキニヨン染色を実施し、4 日目にはタイで重要視されている感染症・WSSV (White Spot Syndrome Virus) の qPCR 検査を行いました。すべての検査においてコンタミネーションを起こすことなく、正しい検査結果を出すことに成功しました。カセサート大学の研究施設には非常に高度な機器が揃っており、最先端の研究が行われている環境に大変感銘を受けました。



ELISA の実施



キニヨン染色した
組織切片の観察



何台もの PCR 機械

【Exotic/Wildlife/Raptor Rehabilitation Center】

このユニットは、最もタイ特有の獣医療を感じられる内容でした。まず、エキゾチック専門の診療所では、タイのペット文化を象徴するように様々な患者（動物）が続々と運ばれてきました。リクガメが最も多く、その他にもイグアナ、フェレット、リス、インコ、ウサギ、ワラビー、ヤギなど、日本では珍しい動物たちの診療を見学できました。実施する診療自体は一般的な伴侶動物の診療と大きな違いはありませんでしたが、健康診断、採血、輸液、糞便検査、画像診断など、目にするすべての光景が新鮮でした。

また、カセサート大学には象の診療施設もあり、6日目の午前中には1頭の象の診療を見学しました。その象は右前肢に明確な歩様異常（跛行）が見られる状態でした。治療としてプローブを用いた電気マッサージと経口投薬が行われ、バナナの中に薬（錠剤）を忍ばせて直接象に与えるという、貴重な体験もできました。猛禽類施設は象の施設に隣接しており、最も危険とされる「かぎ爪」の確保など、安全な保定方法についても指導を受けました。



リクガメの患者



リスのレントゲン



猛禽類の患者



象の治療風景



エキゾチック診療所の先生方

【Equine Unit】

カンペンセンキャンパスでの最後の2日間は、馬の診療実習でした。私は将来、馬の獣医師を目指しているため、本プログラムの中で最も楽しみにしていた分野です。

このユニットでは、現地大学の6年生の実習生とともにいくつかの診療を見学しました。対象は子馬から競技用の軽種馬、ポニー、愛玩用まで様々でした。馬の二次診療施設は日本でも限られていますが、カセサート大学の馬診療所には高度な手術設備が整っていることに驚きました。実際、1歳馬の外科手術を見学する機会に恵まれ、大変勉強になりました。将来の進路として馬業界のどの分野に進むべきか模索中でしたが、馬の手術を目の当たりにしたことで、二次診療に深く興味を持つ大きなきっかけとなりました。また、先生方がどんな質問にも丁寧に答えてくださり、私にとってこの留学プログラムで最も大きな収穫を得られた2日間となりました。



馬の手術見学



重度な慢性蹄葉炎の馬



蹄葉炎治療された
ポニーの蹄



馬診療所の先生方

【おわりに】

アメリカでの滞在経験が長かった私ですが、今回のように訪れたことのない国で留学し、現地の獣医療に触れる体験は初めてのことでした。

海外の獣医療を学べただけでなく、自身の将来の進路についても計り知れない刺激を受けることができ、期待を遥かに超える有意義な留学となりました。留学であれ国内の実習であれ、一つひとつの経験が自分にとってかけがえのないものになると実感できたため、残された学生生活でもより積極的に様々なチャレンジをしていきたいと思います。